

3. 黒崎町の性別・年齢別集団組織(黒崎町)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高窪, 洋理子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4865

3. 黒崎町の性別・年齢別集団組織

高 窪 洋理子

- I. はじめに
- II. 組織と活動の概要
- III. 組織と活動の変遷
- IV. 考 察

I は じ め に

性別・年齢別集団組織とは、同一の性、年齢ないし世代を基準にして形成される集団のことで、黒崎町にもこのような集団組織がいくつか存在している。その活動は様々であり、また以前の活動と現在の活動とではいくぶん異なっている部分も見られる。

そこで、ここでは各組織の概要と活動の変遷について記述し、考察してみたい。

II 組 織 と 活 動 の 概 要

黒崎町には青年会、婦人会、老人会、子供会、育友会の5つの組織と、「つれ」と呼ばれる多数の集団が存在している。ここではまず各組織の現状での概要について記述する。

1. 青年会

現在の黒崎青年会は、既婚・未婚を問わず15歳から35歳までの男性が加入する。子供会が小学生までなのでその後しばらくして青年会に入るとい形になっていると思われる。現在、会員数は30人ぐらいで、一応全員加入の原則をとっていて、会費は全員から集めている。これはそうしないと祭りなどができないためであるが、活動に参加しないものもいる。現在の青年会の活動は祭りのときの獅子舞いである。祭りの1ヶ月前から、夜、青年会館に集まって練習をしている。その他の活動はほとんどない。活動しようとしても世話をする人さえいないという状態で、何もできないようである。青年会を取り仕切り、その活動の中心になる年齢（30歳代）の人はちょうど仕事真っ盛りするときで忙しく、青年会の活動に参加できる暇がないのではないと思われる。

2. 婦人会

黒崎婦人会の加入の対象は60歳までの既婚の女性で、1世帯1人の加入が義務づけられている。1995年度の会員数は会員85名、準会員5名である。準会員というのは60歳以上のお年寄りのことで、役員をしなくてよく、会費も半額でよい。黒崎は7つの班（1～6組と山組）に分けられているが、役員はその7班それぞれ1人ずつ順番でなり、黒崎全体で7人いる。この7人が組役であり、その中から会長と書記が選ばれる。会長の主な仕事は、区の事務所がもってきた区費（小物成・黒崎町の会費）や婦人会費を書いた紙とその領収証を、7人の組役に毎月配布することで

ある。そして組役が各戸に配布する。昔は、「あるき」とよばれる人が取り立てや配布をしていた。また、区の回覧板を回すのも会長の仕事である。婦人会費は前期、後期各2,000円で年間4,000円である。黒崎婦人会は農協婦人部を兼ねている。

婦人会の活動は表-1に示した通りである。苗・種などを配布するとJAから手数料がもらえ、こういった諸経費から下りる分と自己負担分(半々)とで慰安会に行く。6月に行われる県政バスというのは老人ホームや兼六園など、石川県の主な所を視察するというもので、加賀市農協婦人部が主催している。慰安会の行き先は、温泉であるが、役員以外はあまり集まらないようである。また、1月に行われる尼御講は、以前は婦人会長の家で行われたが、現在は公民館で行われている。1980(昭和55)年時の婦人会長は、着付け教室、ぶどう狩りといった活動を通して連帯感を重要視した文章を「婦人活動に人間らしさを求めて」と題して『婦人会報』(加賀市農協婦人部が出している)に書いた。それが見事県1位になったこともあるという。

表-1 黒崎婦人会の年間行事計画

月	活 動	月	活 動
4月	総会、苗・種等配布	8月	(着付け教室…下旬)
5月	ソフトバレー・風船バレー大会…中旬 (黒崎婦人会主催)	9月	秋祭りへの参加
6月	県政バス(農協婦人部主催)	10月	運動会(橋立校下主催)・慰安会
7月	綱引き大会(橋立地区婦人会として参加)	1月	尼御講

資料出所1995年度『黒崎婦人会総会』配布資料より

3. 老人会

加入の対象は65歳以上となっていて、65歳以上の男女ならだれでも加入できるが、実際には70歳ぐらいから加入している。会員数は90人ぐらいで、先にも述べたように、黒崎は7つの班に分けられているので、役員はその7つの各班から1人ずつで計7人いて、その中から互選で会長や会計が選ばれる。会長の仕事は、総会で行事を決めるときの主催者になったり、加賀市、橋立地区の老人会に役員として出席したりすることである。会費は1人につき年1,500円で、1戸に2人会員がいれば3,000円になる。

老人会の活動は表-2に示した通りである。活動の主体は黒崎だけではなく、橋立地区や加賀市が主体となっているものなどもあり、さまざまである。初総会では役員や年間行事が決められる。また、この総会では講師を呼んで講演会をし、その後昼食をとって解散という形をとり、50人ぐらいが出席する。吉崎参りは毎年4月28日に行われ、その後山中の遊遊館や松風荘で慰安会をする。慰安会の費用は会費と市からの補助で賄われている。参加者は35、6人ぐらいしかいなくて、しかも60歳代後半から70歳代後半の人が多いようである。加賀市北前船の里資料館の清掃

奉仕は橋立地区の活動であり、黒崎からは割り当てで10人出すことになっている。9月末に加賀市老人生き生き大会が行われるが、これは1,000人ぐらいが寄り集まって室内競技をするというものであり、黒崎からは割り当てで10人ぐらいが出場する。11月の15日前後に講師を呼んで世界情勢の講演会、または加賀市の老人福祉施設で1泊の慰安会が催される。講演会の場合は50人ぐらい、慰安会の場合は35人ぐらいが参加する。おやじ御講は2月15日頃に公民館で老人会によって行われる。参加者の人数は、町内で行われるものに関してはあまり減っていないが、外へ出て行われるものについては参加者は減ってきているようである。だから、昔は慰安会などでもっと遠方に行ったりしたが、最近では近場の温泉にしているようだ。

表-2 老人会の年間行事

月	活 動	月	活 動
4月	吉崎参り、慰安会	10月	法話
6月	北前船の里の清掃奉仕（橋立地区）	11月	講演会、または慰安会
8月	公民館、墓道の草刈り奉仕	2月	おやじ御講
9月	加賀市老人生き生き大会（加賀市）	3月	決算総会・初総会

4. 子供会・育友会

子供会は加賀市の連合会の下部組織として存在していて、男女問わず、黒崎と片野に住む黒崎小学校の1年生から6年生までが所属している。その活動は、1975年頃から活発になったと思われる。具体的な活動内容は、まず5月に、公民館を出発してサイクリングロードを通過して塩屋海岸までサイクリングをする。また、夏には県民の森や加賀市青年自然の家でのキャンプ、ソフトボール大会、バーベキューが行われる。秋の祭りの前には神社の掃除をする。

育友会（PTA）は黒崎小学校と中学校（橋立中学校）にある。ここは昔から教育熱心な地区である。夏期、黒崎の海水浴場が開いている季節には、土・日曜日は育友会が、月曜日から金曜日までは老人会が駐車場の番をすることになっている。駐車場からの収入は育友会の経費にあてられる。また、育友会の役員は、海の荒れ具合を見て赤旗・白旗を立てる役割も担っている。

5. つ れ

青年会をはじめ、婦人会、老人会、子供会、育友会といった組織は一般に見られる組織であるが、この「つれ」という組織はこの地域以外ではあまり見られない珍しい組織である。

「つれ」は3歳ごとに組を形成するもので、年長の者から頭（かしら）・中（なか）・裾（すそ）と呼ぶ。生まれたときにもう自分の入るつれは決まってしまうといて、そのなかでの位置関係はずっと変わらない。男女別々に組織されているが、「あいつれ」といって男のつれの行事に女の人が手伝いにいたりすることもある。世話役はそれぞれのつれの頭の人たちが順番です。

会費は毎月集めているところもあれば、旅行に行く都度集めるところもある。預金講とってみんなで積立をしてそのお金で温泉に行ったりする。預金講は山中町が昔から盛んで、黒崎での預金講の歴史は浅い。活動はそれぞれのつれで様々であるが、ほとんどが年1回温泉に行く程度であり、この温泉旅行が唯一の楽しみだという人もいる。またこのつれは神社への奉納のときの単位になっている。現在は三年からなるつれ全体でよりも同年の者だけで集まるほうが多く、温泉旅行や飲み会も同年の者だけでしているようだ。しかし、神社に奉納のときだけはつれ全体で行っている。

よそからお嫁に来た人も、自分の年齢にあったつれに入る。その時「つれまじり」とって嫁ぎ先の家へつれの人を招き、顔合わせの食事会をしたりする。そのつれの人たちはその家におよばれし、後で呼び返しをする。男の人が養子に来た場合も同じようにする。

つれの団結は強く、かつてはつれは親や兄弟よりも権限が強いといわれていた。

Ⅲ 組織と活動の変遷

以上、黒崎町に存在している性別・年齢集団組織の概要について述べてきたが、各組織ともその活動内容は多かれ少なかれ以前と異なっている。とくにその変遷が著しいものは青年会やつれである。そこで、ここでは青年会を中心に活動の変遷について述べる。

まず、青年会について見てみる。黒崎青年会は、橋立地区が9つの村に分かれていた頃には橋立青年団黒崎支部として存在していた。1975～1978年頃に黒崎青年会という名称に変更したと思われる。青年団時代の加入の対象は15歳から25歳までで、加入は義務づけられていた。女子青年団も同様だった。当時は現在のように若者が外に出ることは少なく地元によくいたので25歳までで良かったが、だんだんと若者が進学、就職などで外に出ていったり、地元に残っていても加入しない人がいたりして人数が足りないために、青年会という風に改称されたときに35歳までに延びたようである。また、そのころに女子青年団もなくなった。

先にも述べたが、黒崎青年会は初め、橋立青年団黒崎支部として存在していた。その頃は、会員数も現在より多く、活動も活発であった。1970年代初め（昭和40年代後半）の活動を表-3に示したが、これを見ても、祭りのときの獅子舞だけが唯一の活動である現在との違いが顕著である。2月には若衆御講が青年団長の家で行われた。青年団がぼた餅を作り、砂糖のほかに塩や南蛮などを入れて、それが当たったら笑いあったりしてみんなで集いあっていた。しかし、1975年頃、青年会になってからなくなってしまった。8月の盆踊りや10月の秋祭りには踊りをしたり、獅子舞いをしたりした。昔は祭りは3日間あり、3日間は仕事を忘れて祭りをしてきた。旅行やボーリング大会には男性が10人以上参加していたのに対し、女性は4、5人しか参加していなかったようである。

さらに古くは1920年代から、2月1日に「民衆演芸娯楽大会」が青年団主催で行われていて、

家族そろって見に行ったりすることが、36年間続いていたともいわれているが、これも1955年ごろから行われなくなったようだ。これは映画やテレビが普及したことにも関係するだろう。また、青年団の人たちは、「人夫」として道路補修や用水の清掃などをするによってお金をもらい、活動資金にしていた。

当時は女性も青年団に入っていて活動も活発だったので、青年団内で親しくなって結婚するということもあり、青年団は一種の出会いの場の役割も果たしていたようである。

現在は、当時と違ってみんな会社に働きに出ているので、そろって仕事を休むのは困難であり、祭りの獅子舞いぐらいしか活動はしていない。1995年現在、34歳の人は全員地区に残っていて5人いるが、それより若い世代は大学へ行ってそのまま帰ってこない人もいて、この先さらに人数が減ってしまい、活動はますます困難になってしまうと思われる。

表-3 1972（昭和47）年と1973（昭和48）年の黒崎の青年団の活動内容

月	1972年の活動	月	1973年の活動
1月	総会	2月	総会、若衆御講、ボーリング大会
2月	若衆御講	4月	海岸清掃作業
4月	海岸清掃作業、ボーリング大会	8月	盆踊り
5月	ソフトボール大会	10月	秋祭り
7月	海岸清掃作業	11月	旅行（京都方面）
10月	秋祭り		
11月	旅行（和歌山方面）		

婦人会についてはあまり変遷の声は聞かれなかった。ただ、昔は「あるき」と呼ばれる人が会費の取り立てや配布をして賃金をもらっていたが、今、それは婦人会長の仕事になっているようである。また、1月に公民館で尼御講が行われているが、以前は婦人会長の家で行われていた。

次に老人会について見てみると、活動はあるが、参加者が減ってきている。また、2月15日頃におやじ御講が公民館で老人会によって行われているが、公民館で行われるようになったのは3年前からであり、それまでは1月に上口（黒崎の住宅は上口と下口に分けられている）、2月に下口の家で順番にやっていた。なぜ、公民館でやることになったのかと言うと、順番に家でやっていると次はどこの家でやるのかわからなくなってしまうからだそうで、これはそれだけ人々のおやじ御講への熱がなくなってしまったということの現れであるかもしれない。

子供会について見てみると、昔は子供会で毎週日曜日には神社の掃除、8月15日の1週間前の日曜日には墓掃除をしていたようだが、今はしなくなってしまった。

つれの活動も昔より廃れてきた活動の一つである。昔は「かくせつ」と言われる集まりが盛んであった。「かくせつ」とはつれが一つの家を集まって、大人たちはすき焼きを食べながら宴会

を、子供たちはそれぞれ餅を持ち寄って焼いてみんなで食べるというもので、どの家に集まるかは当番制になっていた。このように、つれは娯楽の場であった。しかし、今はテレビなど様々な娯楽があるため廃れてしまった。「かくせつ」の代わりに今は温泉や外食に行くようになった。この「かくせつ」が現在なくなってしまったため、つれの団結心も弱まってしまったのではないかと思われる。また昔、女性は頭が20歳のときに、つれで京都参りに行った。今は、つれの活動と言えば年に1回温泉に行くぐらいになってしまったようである。

IV 考 察

黒崎の年齢集団組織が今抱えている一番大きな問題は、この先各組織は存在しうるのかという点であろうと思われる。

青年会に関しては、加入の対象となる人口だけでなく、活動への参加率も減少し、その結果として活動も不活発になってきている。具体的には、大学進学や就職のために外に出ていく人が増え、以前ならUターン現象も見られたが、最近はそのまま戻ってこないケースが多いために対象年齢人口が減少した、あるいは、昔は農家が多かったため、何か活動があるときには仕事を休んで出ていくことも可能だったが、今は外に勤めに出る人が多く、会社は自分の都合で好き勝手に休むわけには行かないので次第に活動に参加しなくなるということである。また暇があってもたまの休みには家でゆっくりしたいという気持ちもあり、参加しなくなったのではないかと思われる。このように、住民の生活の変化、特に就業形態の変化が青年会の活動や組織の存続に影響を及ぼしている。

今述べたように青年会の活動はほとんどなく、祭りに不可欠な獅子舞だけ行っているというのが現状である。それなのに青年会が女子青年団のようになくなるのはなぜだろうか。黒崎の年齢別人口を見ても（表-4）、若い女性がいなわけではない。それなのに女子青年団はなくなった。これは女性は結婚して集落外へ出て行く可能性が高いからであろうと思われる。無理に女子を青年団に入れてもどうせ途中でいなくなってしまうのだからという考えがあったのではないかと思われる。その点、男性は結婚しても黒崎に残る傾向が強く、また、祭りのときに獅子舞をしなければならないので、男子の青年会はなくなり残っているのではないかと思われる。もし獅子舞をする役割を担っている青年会がなくなったら、だれが獅子舞をするのかということになるのではないだろうか。

表-4 黒崎町の年齢別人口

年 齢	男	女	年 齢	男	女
~12	37	32	46~50	28	21
13~19	31	30	51~55	9	14
20~25	13	20	56~60	13	14
26~30	12	9	61~65	14	13
31~35	12	12	66~70	9	11
36~40	12	18	70~	33	42
41~45	12	18			

また、つれの活動も住民の生活の変化の影響を受けている。青年会が受けたのは就業形態の変化による影響であるのに対し、つれは娯楽の変化による影響を受けているという点で青年会の場合とは少し異なる。昔はテレビや映画といった娯楽がなかったため、つれで集まることが唯一の楽しみであり、「かくせつ」が盛んに行われていた。しかし、テレビや映画、さらにはテレビゲームなどの普及により、大人も子供もつれで集まることの楽しみを感じなくなってしまい、行われなくなってしまった。また、おそらく当時は女性にとってつれで集まるという理由がないと出かけにくかったのではないだろうか。つれで集まるからということによって、出かけることを正当化できたのだろう。

しかし、このつれの制度は男女ともに残っている。男性は、黒崎で生まれたら結婚しても黒崎に残る傾向が強いので、つれのメンバーは大して変わらないが、女性の場合、結婚して出ていたり、入ってきたりしてつれのメンバーの出入りが激しいため、なくなってしまいそうな気がするが、残っている。女子青年団はなくなったのにつれは残っているというのが興味深い。

また、婦人会は加入が義務づけられているため、会員数は1995年度で90名と多いが、実際全員が活動に参加しているのかということになるとそうでもないらしい。年1回の温泉での慰安会には役員以外は集まらないという声も聞かれ、実情は青年会やつれと変わらないと思われる。

子供会に関しては、小学生は全員入ることになっているため、人数に関しては大した問題はないと思われる。子供会の場合、行事などを決めるのも親であり、組織としては子供そのものより親の意識が反映しているだろう。ただ、今後ますます家の中での娯楽が増えるにつれて、参加しなくなる傾向が強まるのではないかと思われる。また、先にここは昔から教育熱心な地区であると述べたが、それはここに黒崎小学校が存在することと関係があるのではないかと思われる。小学校があれば運動会など様々な行事もあり、その世話役である育友会がどうしても必要になってくる。その育友会のメンバーが黒崎から出ているため、教育熱心な地区と言われるのではないだろうか。また、黒崎小学校という独立した小学校を橋立小学校へ統合せずに残そうという思いによるものなのかもしれない。

最後に、各組織ともそれぞれの会員層に合わせた魅力ある活動を提案し、組織内のつながりを維持して行ってほしいと思う。